

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡

平成24年度調査概要



平成 25 年 3 月
一関市教育委員会

はじめに

一関市巖美町本寺地区は、中尊寺に残される『陸奥国骨寺村絵図』の現地として著名であり、「日本の原風景」ともいえる農村景観を今に伝えています。鎌倉時代には中尊寺の荘園であったことが、中尊寺の古文書群や鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』によって証明されており、その歴史的な貴重性から、平成17年に国史跡「骨寺村荘園遺跡」に指定され、平成18年には「一関本寺の農村景観」として国の重要文化的景観に選定されています。

さて、骨寺村荘園遺跡と深い関係にある「平泉」は、平成23年6月に世界文化遺産に登録されました。世界遺産への拡張登録を目指している「骨寺村荘園遺跡」については、今年度に世界遺産暫定一覧表に登載され、拡張登録に向けて新たな一歩を踏み出したところであります。

当市では、この骨寺村荘園遺跡の世界遺産登録に向けて調査研究に取り組んでおり、平成24年度は、昨年度に引き続き、不動窟と骨寺堂跡の確認調査を実施いたしました。また、伝ミタケ堂跡の調査に着手するとともに、梅木田遺跡では物理探査という手法を用いて、地中の状況を調査したところであり、景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査と慈恵塚の石材復旧も実施しています。本書では、景観保全農地整備に伴う緊急発掘調査の成果と、慈恵塚の石材復旧の概要についてご紹介いたします。

本書により、これらの調査成果を広く公開するとともに、当市の文化財への興味と関心が高まることを期待しています。地域のルーツを解明することが、より良い地域づくりの一助になれば望外の喜びです。最後になりますが、調査に際しては地権者をはじめ多くの方々のご協力を頂きました。衷心より感謝を申し上げます。

一関市教育委員会

教育長 藤堂隆則

例言

1. 本書は平成24年度に一関市教育委員会 生涯学習文化課が実施した骨寺村荘園遺跡に係る調査の概要報告書です
2. 本書は一関市教育委員会 生涯学習文化課が執筆・編集しました
3. 出土した遺物は一関市教育委員会が保管しています

【表紙】 石材復旧後の慈恵塚（東から）
平成24年度に崩落していた石製玉垣等を復旧しました

中尊寺と骨寺村



国指定重要文化財『陸奥国骨寺村絵図』中尊寺蔵

平安時代末、自在房蓮光^{じざいぼうれんこう}という僧侶は藤原清衡^{ふじわらのきよひら}の命令により紺紙金銀字一切経^{こんしきんぎんじいっさいきょう}を完成させました。その功績により、中尊寺経藏^{きょうざう}の別当^{べつどう}（責任者）に命じられ、蓮光は自分の領地であった“骨寺村”を中尊寺経藏^{きしん}に寄進^{きしん}（寄付）しました。こうして中尊寺領としての骨寺村は出発します。

中尊寺には、鎌倉時代後期の『陸奥国骨寺村絵図』^{むつのくにほねでらむらえず} 2枚が残されています。この絵図は当時の本寺地区を描いたもので、中世の農村景観を伝える大変貴重な史料です。

絵図は、鎌倉時代後期に中尊寺と、奥州藤原氏の滅亡後にこの地を支配した葛西氏との所領争いにおける裁判の証拠書類と考えられています。左側の絵図は農家や田圃、川や道路が詳らかに描かれており“詳細絵図”と呼ばれています。それに対し右側の絵図は“簡略絵図”と呼ばれ、村を取り巻く山々がダイナミックに描かれています。山々の尾根線を挟み「寺領」と「郡方」と記されており、山々に囲まれた部分が“骨寺村”であったことがわかります。

また鎌倉幕府が編纂した歴史書『吾妻鏡』^{あづまかがみ}にも「骨寺」が登場します。源氏と藤原氏との合戦であった奥州合戦が終わった後、中尊寺僧心蓮が頼朝に対し寺の領地^{あんど}を安堵^{あんど}（保障）してくださいとお願いに行きました。すると頼朝はその場で骨寺（東は鑑懸^{かざかけ}、西は山王窟^{さんおうくわ}、南は磐井川^{いわいがわ}、北は峰山堂^{みたけどう}の馬坂^{まさか}）を寺領として認めました。この際に示された骨寺村の四至^{しいし}（村境）が現在も地名や遺跡として残されています。

景観保全農地整備事業に伴う緊急発掘調査（字要害192-1,2地点）

ここでは、景観保全農地整備に伴う緊急発掘調査の成果をご紹介します。発掘調査では、建物規模は不明瞭ながら多くの柱穴や土坑、流路（沢）跡などを発見しています。

流路跡と考えられる遺構は、遺物が出土していないため時代は未詳ですが、山側から本寺川に向かって延びており、縄文時代以前の自然の沢の跡と考えています。

柱穴の一つには当時の柱材が残されており、柱の年代を推定するため放射線炭素年代測定法という自然科学分析を行っています。分析によると出土した柱は15世紀末から16世紀に切り出された木材を使用していると推定され、室町時代から戦国時代頃に村の営みがあったことが予想されます。

遺跡からは9世紀ごろの土師器の甕や須恵器が出土しています。同時期の遺物は、調査地近隣の味ヶ沢でも採集されており、平成21年度に調査した平泉野遺跡からも出土しています。出土点数は少ないものの、歴史時代の中では最も古い年代を示す遺物群です。住居跡等は未発見ではありますが、出土資料からは、平安時代中頃から村の開発がはじまったものと考えられます。



調査区全景写真 画面右の柱穴から柱材が出土しました。



発見された柱穴と柱材



発見された流路（沢）跡 ※アミかけ部分



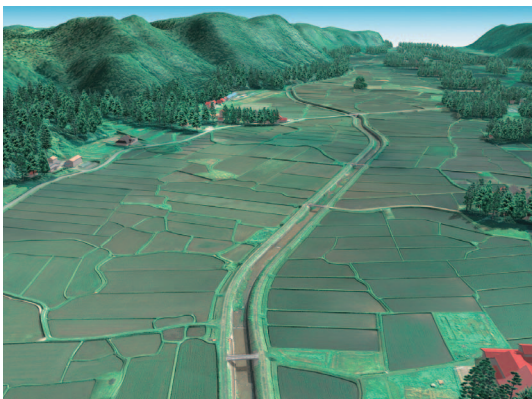
出土した土師器と須恵器（左下）



味ヶ沢で採集された須恵器

骨寺村荘園景観保全農地整備事業の概要

中世以来の景観を良好に残し、国の重要文化的景観にも選定されている本寺地区は、平成20年度から24年度にかけて、景観と農地整備の両立を図った農地整備が行われています。自然地形に沿って曲線を描く畦畔^{けいはん}は、中世以来の風景を今に伝えるものですが、これを活かしつつ一枚の水田の面積を拡大させたり、コンクリートの側溝を石積みに改修したり、景観に配慮しながら事業を行っています。全国的にも稀有な事業であり、歴史的な景観を後世に継承するために工夫された事業です。



事業前



事業後

景観保全農地整備事業前後のイメージCG（岩手県南広域振興局一関農村整備センター提供）

慈恵塚の石材復旧

今年度は慈恵塚の石材復旧も行っています。平成22年度に慈恵塚の現状確認調査を実施しており、慈恵塚は径約10m、最大高約2.2mで、周囲には溝と土塁が巡ることが判明しました。この形態は東北に特有の、平安時代後期の巨大経塚と似ており、村を見下ろす立地からも、経塚である蓋然性は高いといえます。周辺には近世後期の慈恵大師に係る石碑が建っており、この頃に経塚と慈恵大師伝承が結び付き、顕彰されたものと考えられます。

平成22年度調査で、塚及び周辺を精査した結果、石製の玉垣や階段が著しく崩落している状況が確認されました。市教育委員会では物理探査を予定しており、また来訪者の安全を確保する必要もあるため、国県と協議した結果、崩落石材の一時移動を実施いたしました。そして今年度、石材を復旧しています。復旧された慈恵塚は、慈恵大師と塚が結び付き、顕彰された時期と同様の状況と考えられます。

慈恵塚は、現在においても参拝される、地域の重要な信仰の対象ともなっています。本寺地区の住民は、毎年12月に収穫された米を中尊寺に納める際、慈恵塚の拝殿で祈禱を行ってから村を出発します。慈恵塚は拝殿と共に、地域に根ざした大切な文化財といえます。



石材復旧された慈恵塚（南東から）



平成22年度調査前の慈恵塚



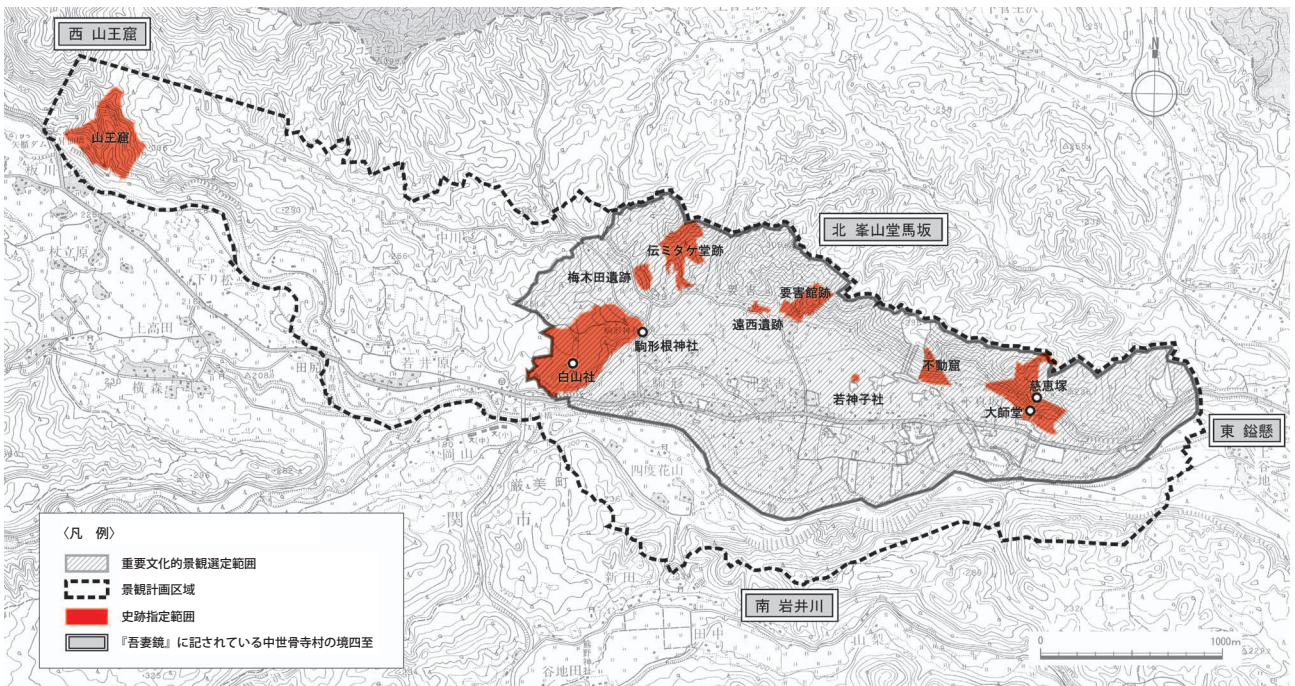
平成22年度精査後の慈恵塚



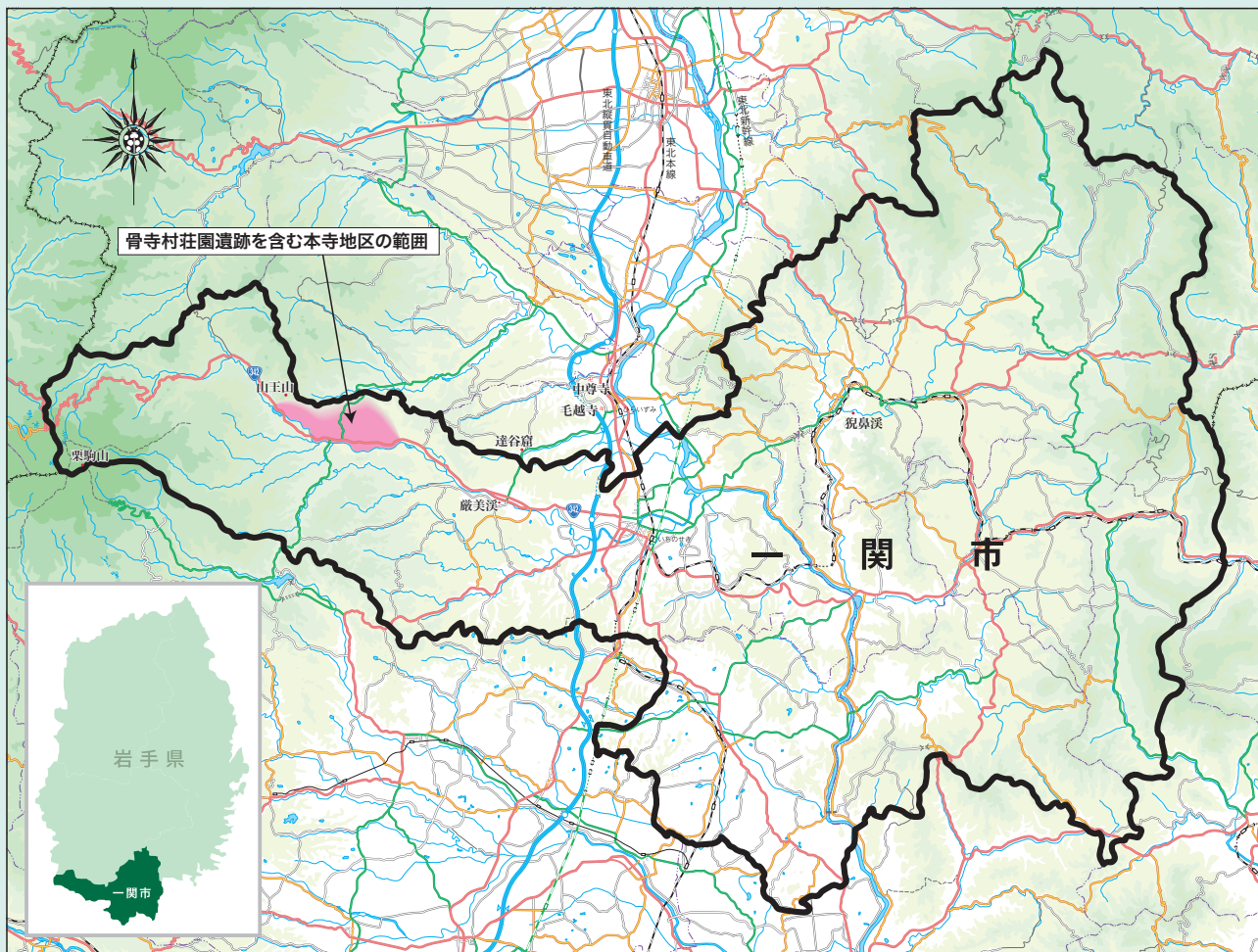
復旧された石祠



慈恵塚付近から須川岳を望む



骨寺村荘園遺跡指定範囲図



骨寺村莊園遺跡位置図

国指定史跡 骨寺村莊園遺跡
— 平成24年度調査概要 —

【編集・発行】 一関市教育委員会 生涯学習文化課
岩手県一関市竹山町7-2

【印刷】 川嶋印刷株式会社
岩手県西磐井郡平泉町平泉字佐野原21
平成25年3月